羣書類從

二百七十三

和書門
類 九五九五 號
函 二〇四 架
冊 六七〇

内閣文庫
和書
類 九五九五 號
冊 六七〇 架
函 二〇四

内閣文庫
番號 和 9595
冊數 670(345)
函號 214 39

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類従巻第二百七十三

和歌部百二十八　家集四十六

検校保己一集

伊勢集上

いつれのおほん時にかありけん大みやすん所（七条后）ときこえける

御つほねにやまとにおや（継蔭）ありける人（伊勢）さふらひけりおや

いとかなしうおもへとこれをもつゝませさりけるを

かの宮の御せうとこ（仲平）宰相ひそかにかたらひましは

しはさらにきかさりけるをいかなるにかありけんあひにけり

ふたりおやいふかきこゝろもなくてわかけるをとこ

へおくりをこしらへて、きりはをとゝ（宿世）せこそいあり
ゆめにてくるとゝ、ゝきりけりたるとこゝ人ハそのを
ひくこゝ物とらそいとゝ色ゝ
にもこゝいゝてれよりう甚そうにそおやもそれハよを
ゝ人をハ女をつゝとゝかゝるゝ男ゝのゝとゝ人を
こゝをゝの此女の家ハお深ゝゝ物ゝよ来ゝ（柿）ゝ
紅葉ハ方をゝんこゝこつ年れ
人をゝ面ハあゝたる箱をゝくゝ人ハ今をゝ系ゝ物ゝりける
恋う紀物ゝゝりてゝれゝ物をゝゝけゝハ
ゝをこゝ人ハ対面をゝひをゝあゝハゝ系ゝ毛もゝゝ物ゝりけの

こそ物すゝゝれゝ系ゝハゝゝそゝりけゝ男ハゝゝおゝゝ
品ゝの女今ハ我をハゝもこゝゝゝゝひを屋物ゝく
そゝゝゝを男のゝゝゝ人屋ゝりける
三物の山ゝにまゝゝん手物をを物ゝ人をゝゝゝ男を
我ゝこ返ゝ
ゝゝこれゝの山ゝこゝるゝもゝゝん人ゝ我をゝゝゝゝや
をゝゝゝ
をゝゝゝこのゝゝゝ消ぬゝ身ゝゝゝハゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝにおゝをゝゝこをゝゝりける
ゝこゝゝをゝのゝゝゝゝゝゝハ我をゝゝれゝゝを恨ゝゝ

やまとふみ　月ごろにさりくしくもあつめ
とてつかうまつりたるに正月十一日
ごろにあんちけるに寺のあるさまいと雲の中
ちおつるやうにあんちける仏人の出やう
いと所ゝとけうれまつりたるのさまいと若やか
ひあるみるまあるにうつくしくおかしくあ
たいおつる滝なをおとしたるはるさの
ちとして雪うちふりたるいとさむくまんを
いとにはかに
をれぬさあるらんをあをいと姫の御さうしん

こうたるうまいとにかりにあるとうみに
おてうちこいとおよやうあるに
みをいとひそふにさてかうつ
こうにてうこうにてそのうあるの
ほとにのれ長所のれりしもりやのりをもりたるれは
継箱
なるのりをひは宮つかうとそせをとふをせをふよ
あんさあるる心花もけうあの御のりをまそ仕うんといふ所まて
名をたてぬ御とれまをいふことをいふ所を所よまけは朱をり
つうぬつうにはは男ハ文をこせたりをんをとへうたいをる
けうにはは男れあるあるうる男うをうたのうをるあるあるを

つまとをとこ人をせちにいふ文をかよはせてさうにあてさうなれ
ばかりをとりの人をもてたりけり女の里にて花盛のおり
ものけをいとはなすとこにおりるとむすひてうけをとりて初めて人をこそ
花すゝれ面てをもてこにそのうちにおとこ人をむすひてをり
こしあをを見てるもやとひとりをいとはなをとこんまをて
かをとうこそをもをおこけうけをこにをいとはなをあ
つまこを思ふ女いされとたりてやりつあふの男なとこの
面りて結ひめ人のこをろをひておほをやとく
をもあをふうをひてあをををこ人ををれをものね
返し

世のをもれ人のんをまをこをいあををけをひをあををこの後
はいかれんれつけをいとはなをれへをんまをれをを
ををあをにいをひををあをあをふうれ山ふをををれ
返し
ものををたのむをれは花をこいあををををををををんを
ものををやひをあをを山をををいあををををあを
をこの後人をふををををををををををををををををを
ををふあをををいををんををををををををををををを
にんををををあををををををををををををををををを
ををんをひををををををををををををををををををを

もひのまにいやあるこゝろ上ゝにて家も打拂ふ事

一

けつてこゝ行きあり家を今文よ拂ひ袖やあるを消あん

こゝひとりけきこゝ人こゝひのめを海てあんあるまつ

つをけるまこゝ人みなもせあよ人さこゝとみるこゝ人

そひてこひけるを文をこせをまこゝ西るもせさるけきこゝハ

ふるこゝへをもかひをあるけるふひこゝにまこゝてこゝ世代

形返るもせさるけきあるめこけいせゝ少を立

ひとるかてとこゝへまきハ

こゝあをとをひとあをれをうこゝ初ハ月をんこゝあるよ必ゝ

ひるふ河の高あるれ結むこゝて 敏相 清のすけ

ゝ但馬ふふあるれてあるれをを寄にてて

さしをおりてやこゝにてとかくこゝあれ

あるるのあるきあるるをひるるをきハ

かけてこゝ八洞の川の流をりやこゝんつるやゆこゝハあるきん

同女をへてつをもあくこゝもすをもあくこゝふを返る

をせさるけきこゝいるこゝらの月ふ米めきてあるる

こゝるこゝの殺あるこゝ海るるきハあるこゝてのるて

こゝけるそれこゝけかをこゝそこゝ行きこゝ

けるをこゝみをこゝをこゝるける

立ちてゆくゆくさらぬ人を面もかあとゐるこしまいとあ
返し
らしへぬるとおもふをとあ面もかとつゆ嫁とてたなみ面れあ
夏のこと　かつさはさのにおるゝ人
夏の月の面もかつゆひのもひとさにゐらひ面れなとのゐて
返し
いとつゝに面もかつ泪のうかみてとさてといまゝをものを
ゆうゆく人とかるをとをけて面つひとのゐかに
時の　宇多　帝めつゝゐ行ゐてけゝうぬ人
ゐる我さうさうけとみつゝもゐかゐかも以

ほとにけゝこにかの男をとそうゐうゐ泪の我人を
うゐつとこひかのつゐ面つれ泉ゐ后にゐるひ
ぬうみゐるゐゐかつゐとゐ面にあさて面のゐる日
うゐかゐてゐるけまゐ面のうみて行ゐせてる
月のうれうるの人をゐとゐ面に涙ゐをゐ涙ゐひ
れ返し
久堅の中におひてゐ面ゐかまゐ面ゐとをたのむへゐる
ゆて帝行り猶ゐ三をとゐれゐつおゐ行ゐ
仁和ちとゐ面に位ゐ泪ゐ行さゐの面おゐて
陽ゐゐゐ泪にさゐの面世ゐなゐゐるしと

おほすのまへの人をいふかひなきことにてこそ
まつりことをすへ給し御代に帝かはりし後して
これはらからさこらめすほりつかうまつりし人々たち
なきめにつゝめてたちかへりし宮のにし方よりかく
よみて侍らせける
おとの紫は消えぬ露はいつこにや有かなく侍るなる哉
返し
うきこと侍るの中は秋めかれそかならぬ君にこそ見まし
となん此帝につかへ侍りし子のみかと人々またひ
なれ給かけ来ぬうちたまのし君は人に秋かなしうちるまに

けしきはいとらうかなしこえもたえだえにやりたまひしは
さらにいふかひなしと思ほしたまへとて
よろひもなくほとにいるとはつかし人なりと
あつかひをこそしたりける
ふるきにたのみし宮にまかりぬるは人々てかゝんことの紫をなれ
とかくはさうして物にかりて返るせしかは人々しくれ
五月の暁時鳥の鳴を聞てよみつかはしける
志ての山越てきつらん時鳥恋しき人のうへかたらなむ
いまは男をもなつけてやつゝ人をもなんたえけりけるこそ
かの宮のこゝろゆかりなくなりまさりけるせに

あるこゝろをあらはしんがためにけふは人
さうしいかゝ裁とう色くなん住家の好望み
ゆゑなりけるにのゝ子ちかくゆゑあるまを
花盛もとゝ松をゆゑありこの好をそう
年をいれ返にさこゝろえさせける
松をゆやゝゑ好の野に住ふとそのゝ花にたゝん
返し
ふるゝも孫ゝ考えて花さかるのゝゆゑ袖ゝ
又まゝすゝ
人をとゝ尾ゝ袖にまゝ花ゝ行ゝ名ゝやゝ

月に多ゆゑうゝ好をゝるひけるさはゝみか
月八日にゝんゝるゝまゝひゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゆゝゝゝ人ゝをゝまゝにあるまゝて
ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

與津かと　あまとの〻ものに　をへて住し
伊勢物語　ふるもあるかなしかりたる
かかしに　泪　いろ
まろれまて　妹のをもこ
ひとくを　たのもしく
つまとかい　頼うけかく
なりはて　こゝろあるをと
なす業　若かと　をに
むまとて　をとこまさは
ろうもれ　ゆるまこ
をこにをみの
いとみをうを　人にあひ
ひとうけう　人くやうく
ひのまうけの　男れ　ゆるれをこに　をる
ん入ありけ　れをに

流れをと　石よりうれを　をのをに　あひうほとを　人つる
こ中宮のまこ　東宮の女御とこをこ　侍類をうを
しをませ　ろ屏風乃　宮れさあひし　物ひこ
ろ法　ん　ける　梅　むをうたちに　をのひをう
あう女に　をもこ
見し人に　又のわ　あを　梅花　をうに　ゆわ　をる
返し
一　たをよりに　梅の　をを　ちるあを　をけと　今はみをて
梅花　盛　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
わをとに　をこ　をを　梅　宮　山里　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

返し

世にさかぬ梅よりさきは山さとの人よりまつは咲きて梅や

菊の花さかりなるを男来てこれみて女のもとへやる

菊の花色うつろふこそむらさきの花むらさきと色に咲くらめ

山男来てかどによみてやすめ花ちるをみなにかくなん

すゝめ男これみて返しせよとあり

こまたなりけるや悲しさに咲ける花橘のもとにかくなく

返し

かまことと君と思へし咲けるさ花のつまにはふやはあるまじ

六月みそかあまりの日に男さゝげてい人つとめ

まかりにまうかけさこは来ぬまでは世には身をくるしき世をそれかな

返し

かけるなれば我ていろふるさぬさへはやゐのせにかくれ給ふ

七夕の日

織女のゝれおもひはしらん年の夜にあふてあひかはしをつくへてよ

返し

櫛機乃るまにてそしへて織ともたのむやあやにかしせん

秋の野に花をよりてかへりて男

秋のはなおぬごかふ花をそへてあそびよ秋ざかゆるやはせぬ

返し

いつくにあるときくやそれすてにかくれてゆくへをしらんと
男せちにねんごろにとはんとすれとも何のしるしもなきに
なをひいろ
わすれつるそらぬくいまはしらしも何のあやめもさらぬ
きひしてひとれいなひ入とあるをいふ女
ぬるとみぬ時のうつりにしかはるをいふ
たとへは男来るあひめんをやうかりそめ
おやゆ行てさらに花をまいる女
夜こもりたまはるんあるこのはのうしろめたなく
こゝろかとよゆるしをまいる

かへるさのあけぬくへもたれかしすかりて雪式踏しはきれて
どうはるはあけぬまいる男
あふさはあるあるはのあるはのまいるをはまとんやしをとを
長恨歌の詩に屏風に流のうをかくをかくるを
せをはるる帝のはるをにて
あるをいるとうをはいるの小姓の泥家を
ひるはるはつるはのつはまてをのうにみせをのうの代
うをはてをいるおりはやう達をに泥のをはるをはるをみる
をすをはるをはるをうをはるをはるをはるをはるをはるをはる
をはるをはるをはるをはるをはるをはるをはるをはるをはる

右はへハささされにけりとて
老の人すらぬ来ニハなりぬせハ世残りたるに誰をとハまし
ゆかぬ人ハこゝろしせぬ物なれハみちを渡ハかなしかゝる心はのし
月も日もかはりゆけと秋の紅葉をハさそしほれとも又そ其まゝぬ
消し方に又かけぬへし春の花ハすかたか残むとおもへて
未まもおもひを羽のなかへにわかのかを語ちへならぬ花をそ雪らん

内侍督の四十賀ニさうしの屏風に
よみける哥

春の歸るなるを待そ春の花を惜ミんと花より井
桜のこゝろなる所にハ花ちらぬらん

竹の葉よりなかるゝ雲か花盛の井手をほとゝみる座く

桜の花さける川つら

水底にうつれる桜のかけ見れハ花の川つら花立うかひけれ

池のつゝみなる松に藤さける哥

見る人のかけをもたのむ藤の花立よるとても結ほゝらるな

石井ある哥

むかしよりハたるまを栽者のいは井の水ハぬるゝ潮行

瀧のもとなる人

水上もむかひみる井をおちくるをも流れ瀬々なる

詠立る哥

いろかゝるほとに立ちかへりたつ日ゝ風へちらす法もなきか
詠雲かふかうそ
たゝにしもあるたゝなはりかんのあるけかゝ
落りたるかゝ
んしてをりしかとかはそ初をうえぬあまにそかる
松のすゑの海よひくまる不
海面のこゝろたる松のみゝとうくしたゝ人のかゝ
まつこゝるをあこゝ所
はるくゝ雲のかさそ水のゆくゝ遠きんゝ社れ
あまはれ家烟あれ不

烟のたゝにたゝあるをハみゝ社の之れかゝ
亭子院北六中のれ賀に春のはゝ
風ゝ海に海風ハ立ゝ日すゝ不にかれいとちゝさ
さたかるこ
おゝゝゝ手ゝこまゝ不れ入ゝ社のこ作ゝこゝん
松に花のまゝ不
あゝこゝのまゝ花八重れ本の子世ゝゝるをかゝすこ作
世おほゝゝ不
まゝにはこゝ行の世くゝ我屋くゝかゝゝあゝこゝ往とのまゝん
北の家れこゝこゝ海風ハ送和の海風ハ

[illegible]の[illegible]に松あるを和
[illegible]へ方[illegible]に[illegible]松あるを[illegible]
[illegible]に[illegible]草[illegible]を和

[illegible]めて[illegible]ようへる[illegible]
女命[illegible]て[illegible]のとと[illegible]おきる男

[illegible]
[illegible]の田舍[illegible]家方田[illegible]
[illegible]所

[illegible]

神樂

[illegible]神[illegible]の色も[illegible]
[illegible]この[illegible]五十[illegible]
[illegible]
[illegible]八方代方神[illegible]

七月七日[illegible]
[illegible]
[illegible]石の宮[illegible]
[illegible]屏風方絵[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

聞るすきに花かるとちらぬ風のうらにしたがのまの

陽宋法の帝れい七十賀にうつみる箱に鶴亀菓

なと聞よ有り

霧る秋菊れ中かるつ有つハいまゝたひらゐ世かきるん

我行の宮れ菊栽合に菊のうつ

菊のうつ色ゆるゆる白霧ハ立ち侍ハ立てもたなつへてき式

つるたん

風さむしと思ふ春の春すゆうゝん夜とて聞やうゝ

んのと雪ゐれかとゆるひつて春ちて見れのつ

梅のむ考ゆさに食まるて姫の行ゆ見ゆ春

姫の里ハ春ゆ春に成て春ん

亭子れ帝の小舟ゆ有つ家に橋花御覧

しにみゆさせうれすよ

思て見ゆさせうせむ成れ浦ゆ白ひの春成うゆ

せれ春ゆ春ゆ有にちれ春ゆ有にうてゆ春ゆ春式

橋花ゆさにちゆ春ゆ有ゆ春ゆ聞せてゆかれ

新法の山廣風の家ゆ春に初人ゆ

春ゆ成ゆ聞ゆ春成ゆ有れ春ゆ人ゆ有ゆ

春の花ゆ春ゆ

うゆうゆんゆ春に初ゆ春に春ゆ白霧

東院より帝ゝ御ぐしをなでまゐらせ給ひて

とゝ申させ給ひて花に成らんとすらんと

東院の花の御ことを思ひ出でゝ

春ごとに咲くらん花と見るゝ

又内

帝の御てをとらせ給ひて

返しす清原

桜花ちるらん時の春風に

今合の御亭子院

消えぬる雪の心地こそすれ

春の雪とゝ申やうなるを雪とのみ見て消えぬ

雪柳枝にゝほひ雪ふりかゝるとのたまはせ

ゝ人々も山里に桜ぞかのあるん後をけまし

あるゝ花ぞにあへず我身ゝ

今合のうたかすのとの

山桜ちるとて雪ぞ降ひるゝ春にとハゝん

めまとつゝも雪ふりかゝるとのたまはせ

雪ぞあれをこの夜ぞさかりに

みそあすとゝ申させ給ひ

春ゝ

をりをりにあるを黄楊櫛ひねてなむをりをりにあれば宮ち
かりさるはるく
かりの花おきまさりてみくつるはのまもなく風そ来宮れ
家乃花をすんくく
おひ櫻ちるを看にあ上所こそいろあらしの吹ば海や
夜物おりふ須
櫻花白雪とのみ見えはかりされ花ちけるのこすら
白玉をはくむ袖のこをれはまこ涙乃こえ如なれ色し
四月一日ふるまて
いつくまて見はぬ人をこそ待ほとはなるすす

返し兵衛の命婦
色にて夜の月れのちけ花ゆとそ思
見れよ夢にあくるこみくつきはらさにら人を海つか
風こえをのそきるかれ櫻花ん乃もちる紙まかせて
二条きこ雪こ乃に対る花をもさ海つる代
なをくこをとたくこ紙濤よやうて
いきこにもちこするめこ月宿れや海とのそこ濤に色海
ぬとをれこめる床夜乃家けこ洞にこえや色涙らん
手紙をれひとこ人の
をのめつたそを姫ら偽ふこるぬん紙人はしこれ年

ゑ

夏出れば冬ふかひとはいはぬなかこそ後うんさうん
いろかこの宰相の北方のまへにまうらせたる
せうそこ紙のこゝろ入れてけさ八月九日の紙
ふかん
雲井にてはひとつらの月たもつ雨をてゆけばなる
月面よりはなれぬ月の村雨はまさるまゝの
夜雲のなかひに入しなかそもくもるこゝろけふんこはなれ
朱雀院まてんにをあらせ人の歌とゝ給はして
けふと今をいの稿いうう雲てあるとけふ紙

面の源日ふん
家詳にそして須のわ稿をやの中ちう面こ後ら年
九月九日ちうはけふ
菊ちうへにおきうへをはけるに手と世のみを病ふる寸
大和にはやうけふ紙初雪よりはふせて
ふたもちうへよせよ心を青ふ声ふ雪ふまろん
枝ゆるそうけを枝のかうふのひてみしへなる
山乃へて
草枕たひこをまゝ山乃へよ白くをかあるふ紙あうん
春花歌うたさせ給て和ふて作らをを八

植たてゝ君かしめゆふ花なれは玉とみえてや露もおくらん

忠岑

うけあもら神にし袖すてつるぬる洞の玉数ハいかんと海

露くさもわくといふんとぬ秋の夜ハ山もて秋あに月なからん

いかなる事ハ舟にけかなん月にけれはまてにもかりすさ哉と

うたふ秋おりひつ稀そかり今のゆるそ渡世旅のよるく

七條の后宮京の后五十賀をたてまつりこおもてみせ給

おなしれ屏風乃絵に秋乃月のけ

我やとてらみつ秋の月影ハ君もみたれにもつすそみけん

家の集哉にてきてしもみちたる秋てすなけハ

いつにも管城をすせ法城をかりこひこハおもしろくされん

おなしき人のかひけるに

まちまちにふぬ世を辞をなるぬめのいまち洞のこすさ宋なる

志ろみに袖秋くせとせ給ひあすなる秋ハ洞なる毛ろ

わひちる時さ人の無月さハいつし秋きのふかさ成らん

おひこともつむらみつらいひ絶ハ中と女の弥そ秋ハなる紅葉

久しうたひを見ぬ人に

故つにおもぬそのハわろ為に人のかく旅のおもせてらんをらん

亭子院乃御屏風の和哥

うへ志つゝ淵瀬なりて色みち余ハかくいつさくそ色もみもみる

ひさかへるる不
知こえてとるばるばるのこひく時は稲妻に雨そそぐらけ
花のいとかりる紀とれて武蔵の国にまいりまして
あはれあまそそにいろ姿みてに恋かてにもん人をなな
れ返し
林の野に赤面つもれ雪をそらて初のる花咲て
人波
いとせ山名れ下ろ赤志のひ人のこぬまに雨れてそをく
ろ
流つせれとるあ雪恨ろみすをたとせ雪かんこ人

うらかれ雪ありたらば恋まとろ須
なりけとのひろ数にるすけ人のとをそ海あめこ久を
林うて人の雨ろ恋
ろと人桃にせて神物ばちろ雨名の空ま立つん
浦ちく法人おろ行を石れ中の思ひとをろ雨ろや
みる野ろ山の雪風さもちく世の門を法こかをも
白法のおたろすう行まる立ろれ不孫をりるかし
新波うこうかさ行れのもつてひ波るてをや
おさ門を波ろてや屋まん法乃とぬるをかいろそ
人に雪ろ行へうかろ雪をてはくぬのろけ法

人しれたるかはかはりひつてをなれるをたよりとなりぬ
人のくらうたるに繪に書に法してたるおとゝんて
れけしたのもるかはかりれたもなきれこゝるかはかりあり
友たちあるへつくしへゆくに
たゝんに我いそてにそせれともこれはまこれはあるを
返し
おろまにそんにのそ海人さ我ハ涙を法よれしけく
うこゝのふるまるて人の玉鉾を法をれい
玉かはかはの身かうこゝるかはかはこゝの地名
美にてもうとはかはれるはかはかはいつら身あまて

人のそうこゝをひけるに
うこゝるれかはかはるに時はかはたはれんのまんにそれたはかはれ
はをそれはかはひこゝるれかはこゝるれまとすとはかはのるれ
返し
手鞠をこゝをそれこゝをこゝのこゝ海をこゝはかはこゝはを
又返し
あるれかはこゝにはかはのはかはこゝのをこゝるれこゝ実やはすれ
湖のそうれこれれれれれかはれまをこゝはこゝにみこゝはかはのはかは
たとえ
度をにはかはれ声もこゝをんはかはゆくはけくはれもるに

返し

暁の秋さめ身にしみてしぐるとも
ちりかぬ花を見るぞうれしき

廣風に七夕のうたみてつかはす

ぬるとこそ人のゆるすと聞ちりぬ
年に成ぬるかさしいつる物なりける

たゆまじにうれしきものはしぐるる秋しおかる

廣風の後に歌をとゝ歌ひとりゐ出つゝ

つゝ

歌をとゝ月の前の月のつゝえ分ひなたゆまじきれ行り

廣風の詠

山里にやどりをせハ時雨ぞ人をれさ袖をぬれ

是も後に碁うちたる不

秋のうちもかつにあり秋もせゝにあるものゝあと

廣風の後に歌をとゝ

秋つゝとめて聞ぬさに萩の露ぬ法のそらん

式部卿宮ようせ給て十九日八てゝ人〻聞つるに

かゝりさて聞ぬにまるの人のゆにいそおろる泊ぬらん

ものにいかゝ多紀ぬ秋ハせんひとゝ色ぬ合ぬに

さいと明ぬる人日

あるとしれる三れ声したるかいとうあるを人とすかん

人うり

みにそくらせいとも人をあるとうとうやとさせんと

きあるとしてのうるかこさ世界ハ大方ここ我おそれや

ぬこさあるとあるりんらくいるをうたるをとりうしもるる

ヨりこともやこの中にも見あらんあるのかうをもかにうをて物を

月のうるるをもうるとて井にいるうるこうあへを

伊勢集下

八隈の大将はは年賀状中納言はは志のあ廣風の絵に

子日松家に松あるあ家

子をせ物ら松どいるも松をうる人をのををうるけら

柳ある家

我おるるるる生ら移とも柳のいとをを人多ひくあるをうけら

義に鶴ををうら

岩の上我をみるのたるいるあハ世我長ものもるへをるか

女郎花おるるるを我をいすを人ををう

姥の野れもの多ををにを我をあるひるのをるる人ををるる

又をこせてろ〳〵のあるぜをしにおろそとこうて
きハおもおるすあるたろ、こうぜるにゐんちゆる
大宝にらかけきハ雲のたにそうて世ゐる
返し女
とゐちろはとこのあるとろに雲ら鉄いそこうくん
家ちからけきハ又男
はくろあるこゐるとあるふい光さしきちゆ光えもすゐんとそん
ひ返るにいこ鉄しすひてやるろ仕きい
かこれ海のこさ光あるこさの浜ふ名物たれあとと波や浜ら
返し女

なこれ海のあきこ浜こん異はるこなこ浜んのの浜こすとあ
又男
かこれ海あきこまころへこさ物あふふろ私と歩ちよゐこ
返し女
あきこあろ毎こへこもたをくひここころこも浜のたろ
又男
かこゐるこうこへようあるきこ舟ふちてふ風や波と社ゆて
女
おひの格にきハあるこて波めこもゐのいろにら浜やこん
又男

風吹ハ西の山くこ風つ来にいろをとをとあらし那
[illegible]
おろろ[illegible]ろ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

初雪ハ[illegible]日

神な月時雨をちこちの[illegible]

返し

雪雨ハ[illegible]ハ神なる身はなに神のめぐみも社れ

[illegible]

風吹ハ[illegible]雪ハ命[illegible]

[illegible]宮ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとゞ身のうれしさも成めるるもゆるるけるに年ゝ絶ぬ
あひよりひて相はなれのまゝ細にやうなきえめるゆかり
いとゆくすゑをかなしと思ふにうもつくしかねてこゝろ
源門院よりさとくさうひけるのみちみちの
めつらしくにとりてのりよ来てそろに
志津のうらこそつゝん舟はなれのらくかとゝ安らこや
返し
志津のうらこそあのはてもうとうこそ流まる
はくしへのくにに
行きしてこゝろくるゝ人ゝのそれのの上ゝてあけ

ひしへのくにに
美ゝ葉つゝるこゝはこゝにあるえてこゝねこゝめるゆるせおこゝ
おもふるけるおりに
ゝゝ塩のれおひおゝおゝ
膳ゝゝけるのよゝゝゝ
たゝけれも
きにゝゝゝけるやゝゝ
我ゝゝゝ
三月ゝゝ
橘花まゝゝ

せきさう法師いつれにありてなりしか
一　何よりか人の云うをみけるに
別ていつあるんと思うんかさうたうの世の命をおく
思ことにつけけるに
分のうれをもとめたよりに来あくしこいひもれたるの
いせれ海に寄へて住あまあるきいつもとのうんかつきおろ
ぬくぬよりて為うさて
ふもまうひまうふうことをうんとうやあれこねに分の海うん
きこあるれを我学ぶの洞を袖のうへなるう洞せるうとまれ
前栽うえてするこひけうに家の人をあうね

人をうんこうひてすかことをぬこせてうけるこ
何うとを海のを海もあるあ意すとも数うれぬ云てそつむ
故中宮九門行のうとうみ
をうをうれもの負ひいうを行のせてにもまを守ハ海をつ

返し

百度に数ぬれあるを百ひあるこあ思ふ
お月をいある年
おりあのつけうあにいおおひあるを我を恋こと
夏ちの月をうをうて月あうハ我ご海よりんあるうを
ひあまを月をみけるを夏虫ハ消てやあをやらん

七月七日

ゑつくしたのんこ男よりの文に桐枝つけをりやうに書
こゝぼを書てこゝろ返るあり者う院の帝
かつらにあるほとに生まよりせてう
あふほとに門を開てこゝろとは桐枝つけよりこと那れ
返し
たゝそひかをとはこれを宋めへを桐枝つけ人めやいを
今はあいしこえんしけれは
あをとやをいかをうれ文あるじんひあ人あれるあに
門よ菊れ宴せをとせ行ふ歌

桂のもゝ姫く宋ゝや菊れ宴新えをひと元に宋程武
亭あれ帝ゝつるを行んを宋ゝ桂
白露乃おさいやをうん百歳をうはふ桂は物をかあしさ
ゆるれこひもおをあを歳みさんをのいかをゝ私
とのをうけをうに出をうに生をのふ
月ひをにあるあ年ゝ桂おをあををもたをうをさん
人のをに尾花のいをたをゝ桂やたを宋のふ叶
ゝ桂みんをこををうける
花すをにかにをおあるやをは昔をの武芳ゝ武芳をみを
やををに桂をあをつけを我ゝるを海をゝ尾花に人やをやを

ゆくすえとみまとるもいかなる社の神にかはやすらはせこゝろをかけ
ゐるとくらゐ高き人をもてなしたまふ男のいとはるゝこゝろひもけなんを
たゞ清らにねがふとうんぜんゐんにあつまりもうんぜん

仁和寺殿の人

白雲のあなたにかすむ月影をそこに社ぞ思ひ

返し

雲のうちにかすむ月かげ

時雨のあとのあきの夜ふかみ

めぐりあひて見しやそれとも分かぬ間に

雲かくれにしよはの月かな

[illegible]

仁和寺にまゐりて社あまたにまゐりたまへば

みやこ人おほく詣でけるやうにかつがつ家にかへり

まゐりて花に遊びしもむかしの人をもかたらひ

つゝをりけり

梅花のこゝろを義公にたづねたまふ

返し

春ごとに立ちよりてこそ見なれしかとはるかに

うちこそよりて

ゆきにいろをかへぬる時にあらずみをうらぶるのもたのもしかな

いとゝの別当のもとに

山風ふきてちりかゝるもみぢの紅葉あり汁を流すとてゆる

返し

おのがさまあらかはそひきてもゝ人なりにてうゑくるもゝ舟

あり蔭をあらはいかゝる秋の野のいろ潮をゆりてもゝ舟

あふぎのうらにあるもゝ

むすひ出ん人のゝ舟あるをとゝてれて秋の風ふかん

男ありけるもとにいに

伊勢のうらにいきよする奥波はなりなりの代

すゑのゝ山のめをちらは岩にあらく波の数をとゝるなりけ

はさ潮さゝ潮の色もゝ人のけはなりなて

蔦に分ける物ゝ人ハ数まそも我物ゝ分りこはるハえて潮し

今ハとて別るゝたもとゝ物ゝあをとゝれぬ袖のまそ侵れ

返し

ちりぬとて別ゝ時にて潮をハ我を潮はおもひきゝ潮し

雲ちる時をゝ我さへゝ友に者ゝ別ゝとそゝ別ゝ

袖をたゝこゝ物ゝ人の結ハ別ゝ思ゝとそ結ん

人

附者ゝ別て絶ゝやとゝ思ゝ別ゝ物ゝ

ゝ宿ハ人ゝ物ゝ来にゝ別ゝ花の別ゝ

文

山ぶきのはなにて人に詠みてことひとことをかたりけき

[illegible]

ゆえにいとも風あんじ思ふ方もさこそあらんと思ふ人

人

[illegible]もたのむらもあやはせにいふ方もあるべきことなり

返し

心地ともあるべき事にあらぬ海をば後うれたるなり変へさる海

[illegible]にいとも名をたらけきハ

[illegible]の日名をあんに百度れ人のあるを思ふ[illegible]

返し

洞のこもる分のうとましかるべくて人のあるべきまでにしかも

おとしのこもるとて実にあるべくしのしたるにあるべきこと

やせうるこの門ハ神あ[illegible]ることをふにとつをぬこハうれあ

人のもとに始めてうてを歌文にて侍さしてあて

[illegible]のもあひの君にうそかとかとみよさしけるうそ

[illegible]ばハ白玉がらをれハ色かとうけれ

[illegible]洞うるとうしてハかていつるとりをありひらん

返し

[illegible]乃洞しこハみとう色れ神をみうてもそ海あ[illegible]

人乃ちこれをみて[illegible]

ゆくこゝろの人をとゝめんよすがもなきに、ひとりのこりて月ごろ
七夕の絵よ
いとたゞかくこゝろにくるしきものかな、ゝとあるほどもあるべきあた
をうらやましくもあるかな、ほらの中にかくれぬるなりけりの枝くらべて
人のいとまなくたゞなるをうらやましくて
かくてのみかくて雑色おもはぬ身をもとゝのへんとやう
そむきはてぬれのちをせめかたきものかくこゝろをしれ
らもこゝろまどふ用の川あるいはうあるをにしてかくれ宮舞
人女
素霊たちかくこゝろにもとゝのへかねぬ

返し

あかつきぬ風よんをたゝへつゝやふかすれどこゝをせんと
うれたきこゝろ人をまもりてこゝろをくるしうさりける
相れたひ者のあるに光れてけるハ
雲のまの月へとうらみ月と思ひをいとうとまをとまるまし
住里ハ雲ゆかりなれとなれ方の月ぬるものあさとてもけら
妙の花おもひをあつてこゝろ好をゆるせ愛に
返し
人のかたハ月ものもけるとも好ゝる風にうとうとうん
声あてゝ行こゝにかりなをうれたの月はなきこゝをあきさに行る

逢へぬるは思ひはや秋の野の草木もあはれとこそ恋ならし

秋なりてちる木葉にもみえなくに露やは人の心をもかれ

うらもなくあまのかさねて白玉をみし海よ袖は海となりにき

ぬまにて人のまかりけるもいかなるに見えしるかなけれは

三月晦の日鶯のなきけるに

ゆく春と声くるしうなくは秋のまなりさとたのむ心あ

梅か枝わかれにおりぬ枝まではなかりし秋をあはれうつせる

春の花の立ちをすてて行くはなにもなき里にすみやなりけれ

これもまたわか人をよりにたるを男はこれあつる

ゆくんかひつまとのひける返事に

思川たえす流るる水のあわのうたかた人にあはて消めや

人にあふ洞は春をぬるけるたよ思ひのはるは旅へし

いとおもしろき桜花折て人のもとにやりけれは

桜花色はさかりに枝なからとおもふにみましはなかさなり

返し

みぬ人のうとくはかなるうつ香にみえてなしにしおしくは

友たちなりける人の思ふ事ありけるころとふらふて

世中はいかくやく風の音ゆかしはなのやうなし哉

返し

世中はいかにもさや風の音は嵐に秋をふく花のとしそ

法師やう寺にて后宮おちて海へけるに供すと
人〳〵ことに月のまとかよりはとはる事そひとをもてしらぬ
ひるにかよれあるとうき風のとをしとをもる花すもゆく
れかゝ猶をやをしはるこうくに夜はすこしにかをさかりて
法皇にうゝおろ〳〵なりてその夜七條の后のこゝや
人〳〵にとてとにあるこゝ後行のかをかうれ橋とかはるぬん

返し

ぬるゝ身はこの中にあれとやはられ橋にあやはるこうん
秋の野に咲てあるこゝひるの白露はこをうこゝひるの人〳〵のあらこ数へて
いとはるこうるひるの秋のゝうきにて枝のあ事をちらさに分る

不ふ返の関は秋こうの海うをもこうる秋かこて我頼こん

返し

かう海せを夜は秋こたのまるしぬるまもけくこうんご思へは
秋もいまこに人をを宝蝶れ秋あゝにもちるにそうける
まこうれゝこうれるける白玉はこうふ袖をもちるたるをぬ
ひるこうかをにみうたつきこゝ秋る男
やへこうるこうるこうるもはこうぬるをにこにあをこうんこゝ

人

ひるこにも身秋ゝうあれこうこ八我もせ秋ひへこを思こうかい
ぬをひへこをせうしぬみをに秋こうるこゝや我こへう秋て流をこうあ

夏とても人のかるかまくらへいまたかるゝまくたよせて
こらるゝ所をとまりてはまるゝ姫とあてこいんへ花ぬ
面ゆ入るにうとてもみとをやくんにのてあるまゝ
返し
人まのてうのまてゆかてこるこ花むせ車
夏宮ゆ入るいまのうとかもゆまるんゆけあんてすれ
りまゝまよ舟く神とゆまゝて花すゆ色ゆうるこを思ひ後ゆ
ゆひのうるまゆまるうにあるまゝつるゆをぬるらぬくやらゆ
おるてるく物ゆ花をて物るとにあるかぬるを面ゆとおりへて
ゆもるるゆ宮の後もまるゆ物機やまゆりるゆとまるてあるんん

かるうかくゆつる泊やゆとうんくるまゝつるかるゆるるん
やとかるんとを夏みまゆかくるうる夏ゆるうにゆかるをうんてかん
枇杷のおるて
ゆくまゆの宮ゆ下夏みるゆれてまるまゆ宮ゆるひゆかゆ
返し
こるゆゆまるゆるゆ下夏ゆかるるゆるゆ物るるか邪
寓ゆ夏ゆねをまゆ物山宮ゆ後ゆるゆるまるゆる代
物花ゆるるふ夏人ゆ宮夏のゆあゆかゆくるゆるゆ丈ゆ
宮川の山遠しこゆ夏宮ゆおるも物をるるゆ汁ゆ
夏ふゆ宮おるかゆるゆ宮ゆ物るまゆゆ袖の夏ゆ

ゆきのまにかくれぬ梅のはなのかをりのみをとめてをしまるるかな

返し

雪ゆゑにかくれぬ梅のはなのかをりとおもふにつけてもそでぞしぼるる

雪ふりてとうぢの花のかをりにそでぞしぼるる

白雪のおりてとけぬとうぢのはなのかをりにそでぞしぼるる

梅のはなをこれかあらぬかとうたがひてをりて

ゆきかとのみうたがひてをりけれどこれぞ梅つゆにぬれたる

雪ふりしにのこりたるうめのはなのかをりにそでぞしぼるる

院の帝の御方おはしましけるに女御もおはしましけるこれらに

て酒に酔ひてをりけるを見て枇杷のはを

女御花をるとをんなの枝のかをりにそでぞしぼるる

返し

ぬれてをるとをんなの枝のかをりにそでぞしぼるる

右京のうねめにおくれるをりに

月の袖にうつるうめのはなのかをりにそでぞしぼるる

返し

たちかへりうつるうめのはなのかをりにそでぞしぼるる

故中務宮のうねめにおくりて返し

あはるとまの方へにうらかく角にはもたをさうけの

返し

はるとをかくへはやうとれはい人のうらめねをやちん

又あはとうり

かへしてもいかあおのひとをくつをいかるとをのまうかん

返し

うらうとやちうへもかへうけんをうめうかうことをたこえぬ

をはををうれをあへ人のうへんうてをなはさうれうれ

をうさかをあちをいさうをぬとをのをうあををめへうる

うひの花につをく

花の色はをんすとてあうたうはれうにへうらんやと

ううひをへはやうとて

ううあはうこうをはうにはうひをたうをはを

四月にさけう橋につをて院はは人のあへおり

はすををまうそをはをううをぬ

とはうをををいうやうんをうをうをはをあはを

あう人

にうはうをはんをををめうめいそほのうはけをうにん

返し

ずじをのはうれへをはうはのうひうにはけもみうめ来うう

まつ人のさしぬ物にやさよ更て月はいるまても〔我〕はならむ

九條の北の方のもとにこゝのつゝの紅梅を

けふをこそ折てたちたる残されの家

春にしも花のひらきは鶯のものうけを残し置くらむ

御返し

うれしくもさきにたつ人は鶯のものうけをもなかんことは

人のおほせしとかりし残

春には雪にて後は時雨ふるあらぬ方にはあらしと思

返し

雪を残すにかくこそ思ひし時雨にもみすてやらむやはなぬ

時雨する日かくて残しまゐらせて

ときのまもうつろふ雨にもちる物残いとも時雨の後まさるらん

返し

時雨ふるしぬをたえぬをすゑ[illegible]いつすなかるゝ色もぬるゝ袖もあらん

撫子の桜花をそへて

かさなれる花よりもなほ今すこし桜花ちる風の吹もしらなん

返しあさたゞの少将

桜花うつろひて我のこゝろみんと思へはいとゞおもひそやへや人のおもふとも

人

おもひそめしよりもあきらめしをもしらぬ衣のうつるぬ色にいらぬとつる代

返し

身のしるべなくしるべとは人すてと社なるけれ
ある人とうたくとさ
みとせにてつまものとまはとそれあてぬとたるこせまと

返し

あはされやまにかるたぬさはかりもてはかりあるに
川の瀬のうれてあれかとの袖のぬれもしるかな
すしかりこをもとこの花落ふるを風をぬらす

京なる家にいさとあるとうあるへに
けれはこのもとにあるをかこあんなのかりけはとうり

ワ袖のうちにいまる花落人とまねとまうとうたやは
花すれはこるにもいつよも春こひしれはあるを
はるをてはまあはは対るをにうまあはをうぬか
人もうてはつはかくはいうねも宋ぬへうれ
来てまはかこみうとうとうるひもあへはをこ
うとうとの浦うとにて舟我をうとに角そつる代
ふつやうをとやはの色をうまはうきつとはつをうを
大淀の松はうをはうにうてはもかへうかうか
風吹はうはかれのをはをうけて舟我はふはは
奥はは風はのうにをはよさへやうをはは

あめのみかりのひこうの法まのかのほかはまひこつさに
約かく志かやくいはの岩屋あるとはすまをたくあ志ま
人志まをいかるかれもこの孫はうをやうく絶とりめん
風吹はいく田浦乃いく度こんと人まみほ志ま
ゆきせこ志ゆくれ岩のうふこるをやひとせ秋の海あまに
みられあくはうつをいまをたほまれ浦こく舟のつるてはを
袖のうれ色のこ屋こ米ぬもあ志ゆいはあんこすん
あはまはれしなあはうたまこ志こくく成ぬ岩にあひに
津の国乃難波乃はこて舟のこをうをとひまこる我こ
志ま志おのふまをこ志はりめ井ゆもはをうこ風こる

あこれや志かのうゆ舟こうめく寄はをひ乃
石清水こ奈ゆこうこをたこ川こと人志これん
はの時ゆこれ舟をこうかゆ志ゆすのこをもん
みまこやくれこうゆこくく首れいをくく恋こうる式
志川はこうすてはくうちくに首のむくゆ志ゆこるそ
山城の岩間のりれこうそ京こつやゆ家ちゆこん
かくをれあたの京ゆをひいゆくこ人今ゆるなる
ゆこ人ゆこうちゆこのあくゆもゆこうゆをそめん
いつにもゆをとうこ海のあく田川あくとや今はふるまも
はるれをこ行山乃ゆるのつこはこうれをなゆはるみ

ふねのかぢとりの歌に　　貫之

ひとにさそはれてのまの橋あそびしたりけるをりに
住吉の浦のあたりを漕つゝ行に波のたちくるをみて
夕されはさほの山の霧にすむもこの空なる雲をなるらん
ふかなかりてしたれくらの山にてこゝにしこゝのかのうちにあるひとのもとにまかれる書
おとゝのたのしの下ゆくに法あるを聞きもとめんあるを
見るとあるこの海の風をとゝのへてこゝにとまる法のまもる
五月雨なるあるこの海面をみて妹をこゝにあるる
人はいさこゝろもしらすふるさとの花の香をはるかにたつね

秋風のおとにのみ山の岩根ふるこゝろの袖の色こそやつれ
撰原の書にはこの歌を家にはこゝろ花もかれ
おとゝの山本の下風にかくれみくれてこゝろ
雑波にこゝろの芦を枯こゝろ
いとゝあるりのこゝろの岩水のにこゝろ
むさし野の草のこゝろの白露のこゝろ
こゝろのこゝろの小海のこゝろ
成よおもてあるこゝろ
人のこゝろ
おとゝのこゝろ

国立公文書館
National Archives of Japan

ここにいとあしき家つくりたる所おとはいとや
ひとりにをれ入て流水をおとしたるをみるやさ
ましつゝ多くの石にうつる
おとはいはせさ入とおもふ流はをよ人のこゝろのみすゝ
女房ゑへらつゝひ雪をとて
ふるら世をとゝ中にもかゝるさゝ人の涙をそやをんん
とて涙つゝせたるほに返もあはをいまゝ
ことたをもかふ世をつゝはをる人の涙ををいさかゆ
あくまにをる人の歌よ涙をうて物をりのしたの人
ふつゝけゝ

かゝる人のかけたをうをあ屋ゝ底ゝ涙をなゝてそたゝ
ゝ水ゝ水ゝ陰ゝ蔭ゝ蔭ゝにゝおゝひゝてゝをゝせゝあゝり
けゝ物にかゝそやゝをて
歌ゝ沢ゝ者ゝゝひとゝゝへつゝをゝゝゝ者ゝ此ゝをゝをゝん
返し涙さゝ
歌ゝをゝをゝをゝゝゝゝ者ゝ此ゝ者ゝものゝゝゝゝゝゝん
人ゝをこせてゝゝ
いをの涙よゝのをふあまゝゝを歌ゝゝ沢ゝをゝをゝみゝゝゝゝん
返
れゝゝけゝゝあゝゝゝゝゝゝゝ沢ゝ南ゝ生ゝゝみゝゝゝを

こゝ栽家と人のよみて花をやるとて

花の色ハむかしなからにみつるハ人のやとにたれかおほかる

松山よつらきなからも波こさんことハさすかにかなしきものを

かへし

わらこなくなと松山は波こさんとハさらにおもひけるかな

きさにのゝき

いもをいひそちるさくはなりつらんかともかり風のふくたよの木

せんさいなれ本

草枕袖ハ露もぬれてしかとまる袖ぬれし涙せたまへし

こゝちかう

まつ宿にあきらかなしもれおくるとハなかふとちと涼る也けり

かの滝河かくるとき

山田もるそほつのみもうちはせハ嫁かきんとゆふ雨つゝくさ

うき身にはさこともつゝハ涙とこいつまならぬわかみもあはれ

うつゝを見る心よ君したえぬハ文も雲井に露をおくらん

時めくともめしらそ思ひつゝ秋くらんしかゝさかなさすハ

宇田院よりおほせて人のもとにさしける人のかりにに

の宿よ人よおもかれし栽すかしやせるなか合よ人の家に家

返し

はつかりせぬ合せ来ぬともおもなんよむすハまとそせん

さてもあるべきほどをみちかハ松山をたゝて法とこさんとそこ
ろにせしかとかくこハ人にしらめとおもふ物 この花
ゝ物の花をおりてもみてまもりをいまもふるさとの
歌をうかべて
光孝門院御せをもつぬるやとハせにうゝ物そうける
かへりてもとのけさハ御ものこゝろあるこゝ
なりしれ物つゝとやて
経波のゝの物をはるかハうゝ物をいるたとん
中納言乃のあよ毎つゝておりつゝ
同院に侍りしにおもしろ物をこゝ

御ものこゝろけるとうにみてをりける
水れ句をうゝ舟の花のあるこゝ
りの〳〵ゆくに
をるをふ身をいかゝ
をの〳〵にやるとて
けつゝて心のあるてあるこゝ
をるをれをうゝ物をこゝ
かけてたなるのをこゝ
をゝ妹をとゝなるこゝ
をゝ花妹ハ物をこゝ

おやにおくれたる比男ありけるは
あさましくいつかつきせぬ思もあやうれぬへ河なる事ハ
故式部丞ゆかのいてゝ物せられけるそ
なりけるのちこゝろあきんあるこゝろうらもあそなれそあける
中宮うせさせ給けるひ御ゆるしをうけて検非違使
乃ちよりあひてさうんこゝろをいハ
源業に兵衛とうしてまうる身の河よそ見ぬやハみ物
物くわさせ物へまして
ちゝはけかんとを思物をそにても人やさそめとそ
陰の帝ご今ハ帝ごおりゝ給けり河

日ハんかをもてとゝれハ業のわりをぬさ河ハ色やなりゝん
ゝそにさく枝のこゝろそ物ハ法乃面をそける
返し
いかゝとゝれんとゝる法乃面をそくもるゝあるゝ袖の涙
廣風ふ瀧おちたる所
物ゝゝるゝかゝをすゝ流つをいとをはつゝうて流をこそすを
あるゝの山ゝたるゝ桜のをおゝゝるゝゝ
るゝまゝこゝる海くあゝ流をゝひあゝゝるゝ
いゝるゝにこゝ手ハ散をにつゝて
物ゝひて物ゝをゝ花ハ散にゝゝゝゝ身ゝゝ枝ゝ海

あひきてはなゝのいとのまとにまつそえれハ
さひをへてはけよるのあるハおもうはるくあるみとめ給
はるゝ第ゝる人〳〵
わこつ海の姫ゝきんの四ゝ
むすめとをこそ
四ゝうゝこれりに高ゝさハ我さくゝろ
人のをし
ゝもやとはひうんこそ
わゝ姫
君よりあるとをもて高ハ摘ゝさをわゝかの種を肥人よおうん

四月ある九日
こゝ四ゝもてゝ月まつる時ゝ声あゝ
卯花のさけるさゝハ月清
四ゝとゝ花の香とをそ
時ゝ月ゝ花ハ月まつを
行ゝゝる人の
んのゝ玉井のかとにゝ
重月九日引ゝ
や泉井に玉の
玉川乃山井よ姫ゝる白雪ハすまゝる夜のゝちをすまゝ

ゆくみちをとはばかりなる
いつはさせとも
ちりぬるもいとのこんうらにたゆる
あるかもあらしかみぬる人のおもにおとらぬ
好は月をえて
月新の新のあまりにさきのてなれたるんあるかしけ
はなまし
立身こいはもゆるんはなるの花をもたるやや
橋
あるかはるかれ
ゆくみちをとはばかりなる花をたるはなるの花
とはさるかはまたあるはなるの花
とうるかとあひとはなるさきんのうえを我身
かりらんかこをとうん
ぬさあぬるみのさらのてはやしをあるけるとれ数とい
おいさらに我身のさきをはるくはるこ
くらとかくけるんは七月八日
いむとこへ人のうらのまるはのうるそうるはるし
むしひとかるし人のまはいるそひさるふ
月はなるあるものを数すとさしであるのはん朱のう

山橋をわたる人よ
あらんとて立ちとまる山橋姫うぢ老と思てさらるん

乗須

吉柳の糸ゆうてわたるとハ山きぬの常このさと乳
相のうらをてかへつぬる人ともも
時雨ほのうるまをとうそめてあるもそれをおとろかれぬ

人のもとよ

人こうあるれ風のもやれこのとをけへを枝をかうる
男れ紅のもうはあるとよ行へうて
鶴の門渕をこうる心とハみるうるの人を花へるあり

返し

いとうるの身ぞうをハしこ山つ吹を花色を武
故中宮うをさを語へうるなるをたうみの門位とう
をこをたうけう返し

老代おう武　美乃とうハ　雪しとを　現ありうに
姫かくうれ　山の方ゆと　ちうあるを
傳りけて　松のとにて　あまひ
ちうあに　あくハをうる　雪ゆん
うへうさハ　ゆうを武を　おをかへを
おはうめて　雪のこすく　あけてう　おつる波武

袖ふりし　袖にあめつ　みまくさ　いるろ海と
朱なまく　おもふこころ　ふるさに　いと秋さへ
さにそれい　ふるさと　かるくさの　あひきあまを
ものまれ　たのあくく　なさをも　ろろ成ろ
かくしけく　ちりて汁は　はまちろ　いてをへて
ちたなし　打かろひて　あるつ。　今は限り
ちとよあく　ちろ　ちるものろ　ひさ
いろかろとろにかろ巻ん
清きてれ　ちもまに　ろ川白ろ
ものまへ　せけせれを　なれ行く　我身はあを

うひけ　ろをへ　ろをの　ふをひ　ふ
あるまて　あるろに　ひをれ　ろをまろ
うるすの　ろにの　ろをい　かろん方を
ふたなぬ　行そにの　あるい　ふあろれを
ちるものを　あひろぬ　ろをま　あを嬬ゆまい
やはひろの　ろ川　ろをま　ろ
ちく嬬ふれ　ろをれ　ほをあけて　ろをりを
ろをみられを

中務集

五月

雨へふれど軒つまとふる松の末もまだ見ぬ人をまちつる

家の花をうえるを

雨山もうえうえを我宿は花をうえて日ハ暮に今

夜花をうえて春我ハ知ぬ

夜の花をうえすてゝ幼ハうゝ山ハうゝ思ハさるゝ雨

山里に住るを

山里を問まに来ゝ住るまてゝ聞ぬ声を聞こゝ郭

田のかゝゝにゝ